Osaka University Knowledge Archive

Title	景気循環の安定化理論とその方法論 : システム論の経済学的射程
Author(s)	景山, 悟
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61461
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式3

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　景山　悟　）	
論文題名	景気循環の安定化理論とその方法論: システム論の経済学的射程

論文内容の要旨

本学位論文は景気循環の安定化理論を取り扱っており、全5章により構成されている。第1章と第2章はフィリップス型政策の効果が理論的に再考され、第3章と第4章では政策理論の新展開としてそれぞれ異なる非確率論的な不確実性が導入される。第5章では、安定化政策理論の思想的背景と方法論上の諸問題が議論される。

第1章では、安定化政策理論の基本モデルであるフィリップスの連続時間乗数・加速度モデルの基礎付けと政策的含意の再考を与えている。ラプラス変換によって得られる伝達関数表現に基づき、比較静学分析と安定条件の導出が行われる。比較静学分析において、フィリップス型政策を構成する比例政策、積分政策、微分政策が均衡値に与える影響が明らかにされる。さらにラウス・フルヴィッツの定理を用いることで安定性の必要十分条件を得ている。

第2章では、カレツキの景気循環モデルにおける投資関数を扱いながら、資本蓄積が存在する経済においてフィリップス型政策が機能するかどうかが明らかにされる。第1章で得た分析枠組みに基づいて、資本蓄積が存在する経済においてもフィリップス型政策が安定化機能を備えていることが示される。資本主義経済の不安定性に関するランゲの議論を再考しながら、導出した安定条件に基づいて、政策ラグの大きさや投資関数の係数が安定性にどのような影響を及ぼすかが議論される。

第3章では、非構造的不確実性を導入した景気循環モデルが提示される。安定化政策が機能するための安定条件がハーディ空間上のノルム条件として与えられ、非構造的不確実性に対するロバスト最適政策の存在が、ハーディ空間上の距離最小化問題の解の存在として示される。

第4章では、政策判断の曖昧性を表現するファジィ論理に基づく政策モデルが提示される。離散時間の景気循環モデルが状態空間表現によって与えられる。産出水準と資本蓄積水準の高低がファジィ集合により表現され、曖昧な経済状況の判断に基づく政策により景気循環が安定化し得るかという問題が考察される。安定条件がリアプノフ定理によって導かれ、その問題への肯定的な結論を得ている。

第5章では、安定化政策理論の思想的背景が科学方法論の観点から明らかにされる。安定化政策理論における方法論上の問題がシステム論の射程として考察され、認識論上の問題領域が指摘される。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　景山　悟　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	浦井　憲
	副 査	准教授	竹内惠行
	副 査	准教授	葛城政明
	副 査	教授	堂目卓生

論文審査の結果の要旨

[論文内容の要旨]

当該論文は、著者である景山悟氏によりこの数年にわたって研究された景気循環の安定化理論についての現代的試みがまとめられたものである。全5章により構成された内容のうち、その第1章および第2章においてはフィリップス型政策の効果の数学的に厳密な再考がなされている。第3章と第4章は安定化政策理論の新展開であり、それぞれ異なる非確率論的な不確実性が導入された分析となっている。第5章においては、これらの仕事を踏まえた安定化政策理論の思想的背景と、方法論上の諸問題が議論されている。以下詳細を述べる。

第1章では、安定化政策理論の基本モデルであるフィリップスの連続時間乗数・加速度モデルの厳密な数学的基礎付けと政策的含意の再考が与えられている。ラプラス変換によって得られる伝達関数表現に基づいて、比較静学分析と安定条件の導出がなされる。比較静学分析において、フィリップス型政策を構成する比例政策、積分政策、微分政策それぞれの均衡値に与える影響が明らかにされる。さらにラウス・フルヴィッツの定理を用いることで、安定性の必要十分条件が与えられている。

第2章では、カレツキの景気循環モデルにおける投資関数を扱いつつ、資本蓄積の存在する経済において、フィリップス型政策が機能するかどうかが議論されている。第1章で得た分析枠組みに基づいて、資本蓄積の存在する場合でも、フィリップス型政策が安定化機能を備えていることが示される。資本主義経済の不安定性に関するランゲの議論を再考しながら、それを特殊ケースとして扱うより一般的な枠組みをもって導出した安定条件に基づき、政策ラグの大きさや投資関数の係数が安定性にどのような影響を及ぼすかが議論されている。

第3章では、非構造的な不確実性を導入した景気循環モデルが提示される。安定化政策が機能するための条件がハーディ空間上のノルム条件として与えられ、非構造的不確実性に対するロバストな最適政策の存在が、ハーディ空間上の距離最小化問題の解の存在として定式化されている。同アプローチは現実的な非構造的不確実性が存在する場合においても、安定化政策という問題に、ひとつの「最適」性を考慮するための指針を与えるものとして、新たな展開を可能とするものである。

第4章では、政策判断の曖昧性を表現するファジィ論理に基づく政策モデルが提示されている。離散時間の景気循環モデルが状態空間表現によって与えられており、産出水準と資本蓄積水準の高低がファジィ集合により表現され、曖昧な経済状況の判断に基づく政策によっても景気循環を安定化し得るかという問題が考察されている。安定条件がリアプノフ定理によって導かれ、その問題に対する肯定的な結論が得られている。

第5章では、安定化政策理論の思想的背景が科学方法論の観点から議論されている。政策理論において「安定化」という問題をとりわけ中心に据えるという方法論的立場がシステム論の射程として考察され、認識論上の問題領域が指摘される。主として今日的な実在論の立場からの経済学批判との整合性、認識論的価値の問題およびシステム論そのものが持つ限界といったことが議論されている。

[審査結果の要旨]

当該論文は経済政策における景気循環の安定化という古典的な問題に、現代的な新展開ならびに意義付けを与えようとするものであり、その厳密な数学的基礎付け、哲学的背景への考察を含めて、興味深い議論を提供するものである。いくつかの数学的方法、また安定化条件については一層の経済学的意味づけの充実が望まれるところであるが、それらもむしろ今後に開かれた問題として、当該論文の企図する方法論的射程への期待を高めるものでもある。当該論文は、博士（経済学）の学位論文として価値あるものと判断する。